

第十三回 玄和全国競書大会優秀作品



近藤 嵐光

審査所感

今更ではあるが『玄和は本当に作品のレベルが高い！』が審査での第一の感想である。これ、学生部も一般部でもある。

学生部における作品で目に付くのは、先ずしっかりとした筆使いの指導に安定感があり、しかも軽い作品は皆無である。記載作品写真を見て欲しい。さぞかし各学校内でも先生から一目を置かれていと思う。話は横に逸れるが、小生の教室にも学校の先生が何人か居る。高校・中学校・小学校の先生、校長先生まで来ている。所謂『上手い字』が書きたいからである。習いに来ている学校の先生は偉い。問題はそれすらもせず、まともな書写教育が出来ずにいる先生である。都内の小学校・中学校では、こんな先生でいっぱいいた。玄和競書大会に出品している子は、こんな先生より多分上手く書けるのだと思う。この子達、将来学校の先生になってくれないだろうか？因みに、小生の教室に習いに来ている校長先生は、生徒の卒業証書を全てご自身で揮毫するという。今時、この当たり前のことをされる校長先生はどれほど居られるだろうか？小生、今年も勤務先の学校の卒業証書揮毫を引き受けてしまった。

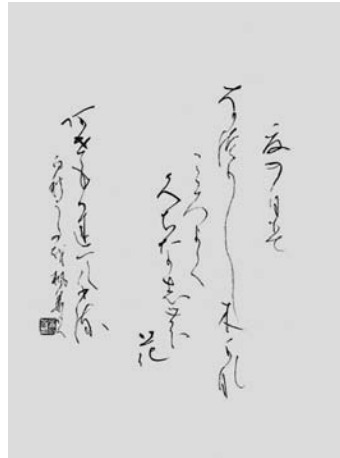
さて、学生部で唯一気になったのが、本文に対する名前が少々疎かに感じる作品があったことで、本文と名前が違い過ぎることで、審査時にどうしても手が上がらない。指導される先生は、どうか名前にも本文以上のご指導を願いたい。

一般部では半紙・条幅作品共

— 玄和書道会賞 —



藤井航之郎(高一)



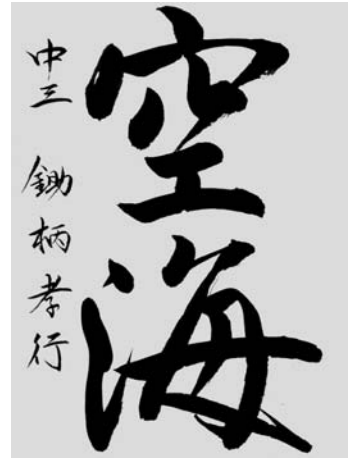
奥田 楓華



宮川ひより(小三)



佐藤愛香音(小六)



鋤柄 孝行(中三)

に、例年より『古典臨書作品』が若干増えた気がした。良いことである。小生個人の意見ではあるが、場合によっては『古典臨書部門』を設置しても良いと思えるほどだ。学生部の高校生では沢山の『古典臨書作品』が見られるのだから、一般部でももっとあって良い筈だ。そこから玄和全体の作品の幅が広がればこんなに良いことはないと思うのだが！

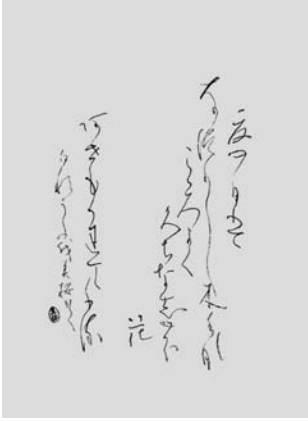
一般部の条幅作品でもそうであったが、半紙作品では特に仮名作品の向上が目立ったこと。このことは審査員全員が感じたことであろうが、審査の結果がそれを物語っていることは特記するべきことであろう。

条幅漢字作品では、以前より減ってはきたというものの、まだあやしい字が見られたことは、真剣に捉えねばならないことである。正しい文字を書くことは基本である。勢いだけで書いてはいけない。『書』において下手よりマズイのは誤字・脱字である。

ところで、悲しいかな世の不景気の風は、今回の競書大会にも多少影響したようで、個人の出出品数がやや減ってしまったり、五点点数が出た方が三点点数といった具合だ。しかしである、総出品点数は増えていたようで、要は参加者は今年も増え続けているのである。凄いことだ。ご指導に当たられている各先生方のご努力は勿論だが、玄和の魅力は増しているということだ。だから今年の作品内容も一段と高くなったように、審査員泣かせは今年も健在であった。

第十三回 玄和全国競書大会
審査委員長 西 墨濤

— 春 浦 賞 —



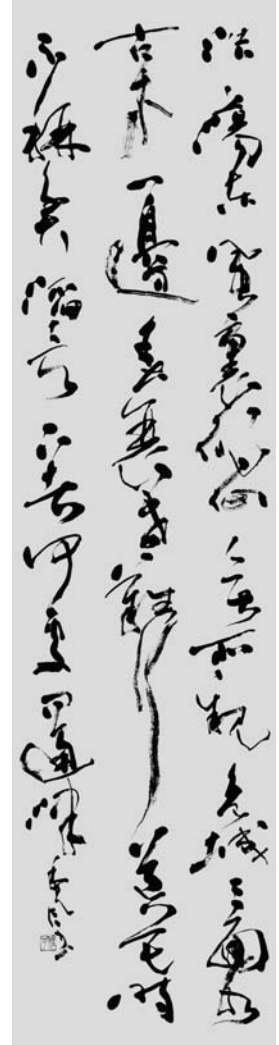
田村 美桜



ケレハー翔太(高三)



遠藤美代子



白戸 香風



渡邊 愛菜(小二)



雨宮 愛(小五)



ケレハー加央里(中二)



帆足 敏子



佐々木絵莉花(高二)



桜井 青浦



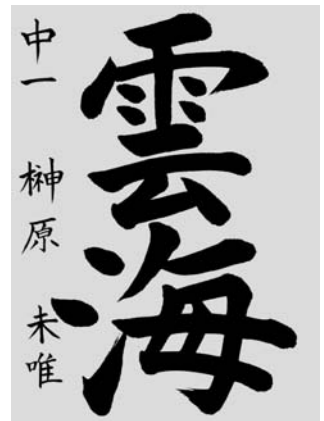
鈴木 蘭嘉



ハモンド芽衣(小一)



千葉 政宗(小四)



榊原 未唯(中一)